

映像「チェルノブイリ28年目の子どもたち」第2弾公表！ OurPlanet-TV 紹介

～いのちと健康の現場から～

「健診と保養」の必要性を訴える



東電福島原発事故のこれからを考える上で、チェルノブイリ事故後29年を経た現地のように知りたいと思う人は多い。それに応えるマスコミがほとんどない中で、この映像は貴重である。「チェルノブイリ28年目の子どもたちⅡ」は「保養」を中心に描いている。30年近く経ったチェルノブイリで最も重要な施策が「保養」であり、一番大切にされているのは、子どもの健康を守ること

だ。「保養」には子どものおよそ半数が参加している。

〈保養の目的は体内の放射性物質除去と子どもたちの免疫力を上げること〉

白衣の大柄な職員が腕を振り上げている。朝の体操の時間。初めに紹介されているのは、チェルノブイリに特化された保養施設としては最も古い1986年8月1日開設の「国立住民放射線防護健康センター」で、130人の子どもが19日間滞在できる。第4級（事故5年後年0.5～1 mSv）の汚染地域に住む避難者や事故処理従事者の子など、治療が必要な子どもたちの為の施設である。

保養の初めは3日間かけての詳細な健康診断である。ウクライナ保健省と科学アカデミーが定めた健診ガイドラインに沿って、身長・体重・視力・聴力・歯科・循環器・呼吸器・消化器・泌尿器・生殖器・神経系などを検査し、その結果から医師・看護師・理学療法士などの医療スタッフ・教員・図書館司書が、一人一人の治療メニューを決定する。朝8時半から始まる治療に投薬はほとんどなく、自然療法・理学療法が行われている。ハーブの吸引、温熱療法、電気磁気療法、マッサージなど色々あるが、子どもに一番人気なのが鍼と灸というから驚く。療法士は中国で研修を積んできたそうだ。食事も治療の一環であり、1日5回ビタミン、タンパクに富んだ滋養のあるメニューを揃えている。総合的治療は効果を上げ、蓄積されたデータは国際学会でも発表している。

〈チェルノブイリ事故の健康影響-四半世紀後の結果・・・山下俊一の重罪〉

2011年8月ウクライナ医学アカデミー・放射線医学研究センターはチェルノブイリ事故の健康影響をまとめて英語版を出版した「HEALTH EFFECTS OF THE CHORNOBYL ACCIDENT- a Quarter of Century Aftermath（チェルノブイリ事故の健康影響-四半世紀後の結果）」。長崎大学も協力しており、その序文を山下俊一長崎大教授が書いているが、映像の中で紹介されている文章は「ウクライナの研究者は多大な努力を行っており、白血病、甲状腺がん、がん以外の疾患などに対する放射線の晩発的影響同様に急性及び慢性の放射線症候群への相互理解に達した。」「日本における最悪の原子炉事故からの早期の回復にとって、チェルノブイリからの教訓は間違いなく有用であり貢献するものである。」というものである。しかし、山下俊一は福島原発事故の影響はないと言い切り、無用な被ばくを多くの住民に強要した。チェルノブイリの事態を知っている行動だとすればその罪は更に重大である。

〈「保養」の始まりは1920年代から〉

「保養」の取り組みは社会主義革命直後の1920年代に始まった。青年部下部組織で社会活動を行う「ピオネール」の夏のキャンプがルーツになっているそうである。2番目に紹介された保養施設はキエフ177学校。キエフ市の学校を拠点とする夏のキャンプは事故後放射能汚染のため行うことができなくなったが、線量が低くなって保養キャンプとして再開した。クラス担任・保護者・学校・医療スタッフで情報を把握し子どもたちの健康管理をしている。

学校には医師が常駐し、4種類の保健室（歯科・物理療法室・アロマ室・診察室）があり、1年生は常設ベッドで昼寝をする。食事は1日5回提供され、1年から4年までの給食は無料でチェルノブイリの子どもたちは健康増進のために給食費が一般の2.5倍かけられている。食事内容については保健所のチェックがとても厳しいそうである。

プレスラブ・フメリニツオという村にはチェルノブイリ法制定後の1991年以来汚染地域から5000人が移住している。この村の学校子ども青少年社会サービスセンターは、スポーツ課、文化課、子ども問題課、教育課、労働局、保健局の協力の下、全国の保養施設からの提案を受けて学校や保護者、子どもの希望を元に、保養先やグループを決める。チェルノブイリの子だけでなく2013年に始まった東部ドネツク州の戦争でつらい体験をした子どもたち、障がいのある子、親のない子、兄弟が多い、貧困に苦しむ子も対象である。

〈「保養」にはサナトリウム型と自然体験型がある。〉

2013年社会政策省に「保養庁」が設置されたことにより保養手続きが統一され、「保養」のニーズ調査に沿って適切にプログラムを立てることができるようになった。現在、1年間に治療目的のサナトリウム型を5万人、自然体験型を240万人が利用している。

黒海沿岸の保養地オデッサにある保養施設モロダヤ・グヴァルディアは1度に800人収容でき、年間13回（1期21日間）計12000人が利用する。ここは1924年のピオネールキャンプに始まり、25人の保養スタッフに加え事故後20人の教員も配置され、夏だけでなく1年を通じて保養を行っている。

保養キャンプには若い「ウジャーテ」というリーダーが子ども10人あたり一人ずつ配置される。子どもたちは年の近い「ウジャーテ」に親しみ、信頼を寄せている。21日間森林や海辺など豊かな自然の中で活動する。最終日、部活動などの成果をダンスや楽器演奏、歌で表現する発表会や仲間との別れの場面は感動的である。

〈全て子どもを主人公に〉

「子どもは宝」「子どもを主人公に」ということばが「保養」の取り組みに行き渡っている。しかし「子どもの健康を守らなければ未来はない。懸命に取り組んでいるが、疾患件数は減らず増加し続けている。」と苦しい表情を見せる第177学校の校長先生のことばは重い。また保養庁の副長官は「健診と保養が大切で、ウクライナは政情が厳しいが、保養の予算は削らない。」と言い切っていた。

国の政策として取り組まなければ「保養」の目的は達成できないし、これだけ取り組んでいるウクライナでも子どもの健康に大きな不安がある。東電福島原発事故の影響を食い止めていくために、政府・復興庁の目を「保養と健診」に向けさせなければならない。この映像によって「保養」の重要性を多くの人に分かっていたいただきたいと強く思う。

- * DVD自主上映権つきで2000円 送料500円 OurPlanet-TV ホームページから注文可
- * 愛蔵版「チェルノブイリ28年目の子どもたちI・IIセット」5000円 送料500円